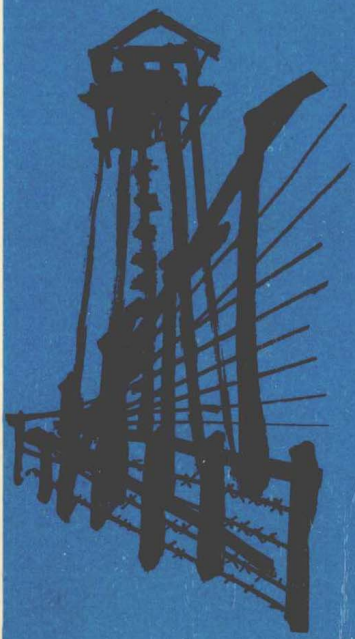
極限状況における人間

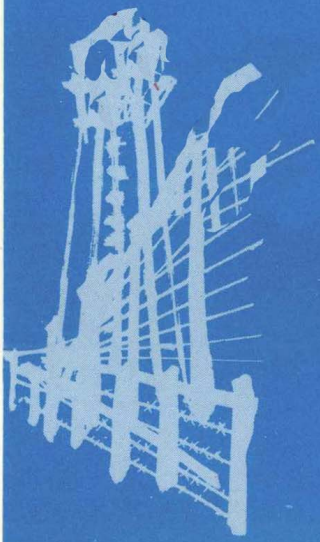
五味川純平



三一書房版

極限状況における人間

五味川純平



三一書房版

極限状況における人間

一九七三年五月三十一日　第一版第一刷発行
一九七三年六月　五　日　第一版第二刷発行

著　者　五味川純平
©一九七三年

発行者　竹村一

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話　東京（二九一）三一三一番
振替　東京八四一六〇番
郵便番号　一〇一

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社　鈴木製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0091-732020-2726

極限状況における人間

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

極限状況における人間　目次

第一部

I　戦争と人間と……七
II　精神の癌……四一
III　軍国主義の悪霊……九一

第二部

I　近代思想史の欠落部分《対談》……一二三
II　《十五年戦争》をどう見るか《座談会》……一三九
III　《十五年戦争》の意味《座談会》……一八一
IV　映画《戦争と人間》をめぐって《座談会》……二三七

付　「人間の條件」を生きた行動家（石堂清倫）……二六一

第一部

I

戦争と人間と

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1　ぼくにとっての「戦争」

ぼくの場合、「戦争」を書くということは、そのまま昭和史を小説の形で書くということにほかならない。なぜそうなのか、なぜそうなるほかないのか。ぼく個人の立場からいえば、ぼくらの世代は、例外なしに、ものごころがついてから昭和二十年の敗戦にいたるまで、「事件」「事変」「戦争」のなかった日は一日もなく、その中で飯を食い、ものを教わり、考え、大きくなってきたのだ。だからぼくらの人間形成は、どうしても戦争と無関係ではありえないどころか、戦争そのものと切り離しがたく結ばれている。言い換えれば、戦争に対してどういう態度をとったかが、ぼくらの〝人間〟を決定したのだ。ぼくが小説を書こうとするとき、この問題が基本的テーマになるのは、むしろ当り前ではないだろうか。この点が一つある。

それからもう一つ。それはこういうことだ。ぼくには軍隊体験、戦闘体験がある。それをぼくは『人間の條件』で書いた。書きはしたものの、『人間の條件』の場合は、人間の極限状況とか何とか言われるが、要するに、戦争もしくは戦闘での消耗品としての人間の側面にだけ、作者の視点が限定していたらしい。書いている最中は、視野をかなり広く保っていたつもりだったし、歴史的背景のほうにも及ぶかぎり眼をくばろうとして努力したけれども、結果はやはり、消耗品＝人間しか描けなか

ったように思う。言い直すと、戦闘と人間との関係は、ほぼ書き得たかもしれないが、戦争と人間との関係は書かれていない。これを、厄介な、一筋縄ではいかぬ仕事だと百も承知の上で、そして歴史の専門研究者でないぼくの「特権」を発揮しながら、今度こそ書いてみたいというのが、ぼくの気持なのだ。

戦争と人間との関係、ことに日本がおこなった戦争と人間との関係では、戦争利得者もいたし戦争犠牲者もいたけれども、戦争犠牲者と言われる者の中にさえ、本質的には戦争犠牲者の立場にいるくせに、みずからはそれを知らず、気付かずに、結構、戦争をよろこんで「食っていた」人間がけっして少なくはないと思う。また、戦争利得者のほうも、結局は、戦争が敗戦によって終わってみると、実質的に戦争利得者ではなくなっていた、といった関係もある。こうしたパラドキシカルな事柄を、できるだけ多面的に、多角的にとらえないと、ぼくたちが経験し、その中を経てきたところの戦争はつかまえられないのではないだろうか。つかまえられないということは、昭和二十年の敗戦以降——これをぼくは必ずしも「平和」の時代とは思わない。なぜなら、昭和二十年以降現在にいたるまで、平和運動の問題がつねにたいへん重大な意味を帯びているが、これは実は平和がないという事実の裏返しにほかならないからだ——まさに今日にいたるまで、一切の進歩的運動の内部に包蔵されている脆弱性、実体のなさ、具体性のなさ、なぜそうなのか、なぜこんなにひよわなものでしかないのかという疑問にも、そのままつながるのだ。

そうだとすれば、ここいらでもう一度、戦争をしっかりと広い角度で見直してみる必要がある。こ

れを避けては、さきに言った、ぼくらが常日ごろ抱いている疑問や懸念に答えを与えることができそうにもない、とぼくには思える。いや、だんだんそう思えてきたと言いなおそうか。

ところで、昭和六年の満洲事変の当時といえば、ぼくなどは中学の三、四年のころで、社会意識がボツボツ具体的な形をとりはじめた時期である。つまり、成人の過程が始まろうとしていた時期だ。ぼくらの精神史の開始期と戦争の開始期とは一致している。たまたま極東軍事裁判の審理も、満洲事変を起点としているが、ぼくの場合、たしかに満洲事変は十五年戦争の具体的な開始点として、区切りの意味では有効だとは思うが、小説としてはそれよりも数年早い時点からはじめようと考えている。たとえば昭和二年、東方会議ですでに戦争の路線が明確に敷かれた——歴史の解釈では、多少の異論があるかもしれないが、ぼくはそう思う——このころから書き出して、済南事件、張作霖爆殺、満洲事変、十五年戦争と書きつづけたい。どこで終わるか、それはまだ予定が立ってもいないが、少なくとも昭和二十年まではどうしても書かなければならぬだろうし、できたら、敗戦直後の混乱期まで書いてみたい。いうまでもなくフィクションとして。フィクションでないと、問題性をティピカルに整理して表現しきれないと思うので、あくまでもフィクションとして、四年か五年をついやす計画で書いてみようというわけである。

2　ぼくの二〇〇人「戦犯」リスト

一年ばかり前から、資料や記録をしらべ出したのだが、戦争の発起・指導に、何らかの形で大きな役割を演じたらしく見える人間を、その経歴や活動などと一緒に書きぬいてリストをつくってみると、陸海軍人、文官、政党人、実業家など各界をあわせてだいたい二〇〇名ばかりになった。この数はまだ暫定的なもので、調べが進めばもう少し数がふえることは確実だが、この二〇〇人が各地で（日本ばかりではない）それぞれ車輪の軸になって、戦争という大車を回していたように見える。こんな名簿をわざわざつくってみたのは、第一に、いくらフィクションであっても、確固たる歴史の事実の上に組み立てないと、まったくの架空の話になってしまい、ぼくの頭にあるテーマが展開できなくなってしまうので、たとえば昭和三年の時点では、日本内地の政党の力関係はどうであったか、陸軍と海軍とはどんな編成と計画をもっていたか、財界は何を考えていたか、政府はどんな分子で構成されていたか、また、中国大陸での主要な動きは何であったか、これくらいのことは最小限度、明確にしておかなければ、その上に組み立てるフィクションが不安定で、くずれてしまうだろう。

それから第二に、これは若干「種明かし」になるかもしれないけれども、フィクションのなかに登場してくる人物を造型するには、やはり実在した人間からヒントを得なくてはならない。ぼくはいま

昭和三年当時を書いているのだが、昭和三年の人間を描くのに、昭和十三年の人間のタイプを持ってくるわけにはいかない。だから、昭和三年の軍人は、実業家は、政党人はどうであったかを、少なくとも自分に納得の行く程度まで知らなくてはならないだろう。あらゆる微細にわたって書きこまれた正確な履歴表をつくれるわけではないとしても、およそのことならどうやらわかるという程度までの略歴をリスト・アップしてみると、それがたまたま二〇〇名前後になったというわけだ。しかし、無駄骨になるかもしれないと思う気持もまだどこかにあることを、ぼくは否定はしない。

この二〇〇名の略歴表、その中でとくに群を抜いて大きく映ずるのが、森恪と永田鉄山の二人のように思う。永田は、昭和十年に相沢中佐に斬られているし、森も昭和七年に病死しているし、両人とも、ぼくが扱おうとする昭和の二十年間に存命していた期間はそんなに長くはないのだけれども、小説の初期段階において、フィクションの下の事実の相では、非常に大きな役割、いや決定的な役割を果たしている。森恪は、東方会議の立役者だし、陸海軍人以外の日本人で、日本を軍国主義的発展の道に導こうとした、いちばん大きなダイナモだった。永田鉄山は、一九二〇年代に入るころに早くも国家総動員の思想を蔵していたらしい。日本陸軍の制度や政策の変り目には、つねに永田の姿があった。これはたいへんな人物だと思われる。永田のことはまだ書く段階ではないが、よしんばフィクションであろうとも、永田は欠かすことのできない巨大な陰の存在だと思う。この森、永田を先頭とする二〇〇人、三〇〇人の人間が、日本内地に、満洲に、中国大陸に、あるいは朝鮮に、あちこちにぐるぐるまわり、けっして一ところにとどまっていずに、走馬灯のように回りながら、戦争日本という

舞台を回しているのだ。彼らは二、三年を周期としてあるときはポジションを変え、あるときは場所を変え、お互いの間に呼応があるごとく無いごとく、ぐるぐる回っている。

ここでぼくは極東軍事裁判を想いおこす。あの裁判では二十数名のA級戦犯を、最初から「戦争のための共同謀議」を図ったというかどで追及したが、ついにそれを立証するに足る証拠を提出することができなかった。しかし、あの裁判がとっていたいわゆる「証拠主義」では、これは最初から不可能であったはずなのだ。また歴史家の場合もそうである。いろいろ研究はしているのだろうが、はっきりした証拠なくしては立論できないという悩みはよくわかるけれども、ぼくらの眼からみると、なぜ、この点をもっと掘り下げてみないのだろうか、あるいは間違いを含むかもしれないとしても、この点をズバリと断言する勇気がないのか、と怨めしく思うときが往々ある。いまの「共同謀議」という問題でも、誰と誰とがいつ、どこで、どんな共同謀議をした、などという、うまい証拠はあがりっこはない。だが、そうだからといって共同謀議の事実はなかったと考えていいだろうか。科学としての歴史は、その一歩先へ踏みこむことは許されないものなのか。

共同謀議の証拠はあがらないとしても、もろもろの人間の行為としての現実的足跡は、はっきりと日本の歴史の上に印されている。それは、何者かのまぎれもない営みなのだ。行為がある以上、それには計画があったからであり、したがってまた結果が生まれてくる。行為と結果がある以上、計画がないはずがない。それを、誰の眼にも見えるような形での証拠がないという理由で、歴史を書かないのなら、ここでもまた歴史の真実は闇から闇へと葬り去られてしまうだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com